

G. ジンメルにおける「物質の言語」
——『貨幣の哲学』を再展開するために——
田村 豪（神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期）

本報告は、ドイツの哲学者、美学者、社会学者であるゲオルク・ジンメル(1858-1918)が試みた「物質の言語」という視座をキーワードに、『貨幣の哲学』に接近し、特殊で個別的なものとは広く一般的なものとの連関のありさまを問う試みである。

ジンメルは、その記述が断片的でありエッセイストとみなされたと同時に、ドイツ社会学の創始者の一人でもある。ジンメルが論じる美的・感性的なものとは社会との連関の問題は、ジンメルが生きていた時代以来、常に問われ続けている論点のひとつである。ジンメルが記述する際のエッセイ的側面は、必ずしも一直線には社会論へと拡大することはできない。それはジンメルが徹底的に目の前にある物との特殊な関係にこだわりながらも、社会がもつ一般的性格を明らかにすることを決して捨て去ってはいないからだ。美的・感性的なもの／社会的なものとのどちらか一方に還元することのない視座が必要となる。

そこで本報告では、ジンメルが実際にいかにして、エッセイ的で断片的な思索とそうした特殊性を越える一般性とを同時に扱ったのかを問題としたい。これを扱うために、「物質の言語」という視座を用いる。「物質の言語（Sprache des Materials/ the language of the material）」とは『哲学的文化』（1911）に収録された「取っ手」、「廃墟」、「アルプス」といった論稿においてジンメルが示した試みである。ジンメルは、決して抽象的な理論を提示したのではなく具体的な物との関係、その物と触れ合う際の感覚を重視した。この試みは、徹底的に目の前の対象との関係に留まることで浮かび上がってくる言葉とその記述ともいえる。

そこで特殊具体的な現象とその記述という観点で「物質の言語」に含まれるのであれば、そうした視座を可能とする条件を、主著『貨幣の哲学』（1900）のなかで探ってみたい。というのも『貨幣の哲学』では、抽象的で一般的な性格をもつ貨幣がいかに人々の感覚や心理に影響するのかが論じられるためだ。ではそれはいかにして可能になっているのだろうか。

この検討によって『貨幣の哲学』で時代診断的かつネガティブに展開される「客観的文化的悲劇」といった議論と表裏一体でありながら、貨幣経済がもつポジティブな側面をより精緻にリアリティのあるかたちで捉えられるのではないだろうか。さらに時代診断でもある『貨幣の哲学』を扱うことで、「物質の言語」を可能とする条件は、決して特定の個人にのみ可能だったのではなく、ジンメルのみた貨幣経済という現実のなかで一般的に可能となりうるものでもあったともいえるかもしれない。